
昏い道連れ

洸海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昏い道連れ

【Nコード】

N4558Y

【作者名】

洸海

【あらすじ】

妖退治を生業とする流れ者の雷火は、雨宿りに選んだ木陰で一人の少年と出会う。神官戦士になるために必要な「しるし」探しの途中だという彼と、ひとまず共に行くことにする雷火。だが少年の背後には、ひっそりとして来る不吉な昏い影があった。和風異世界ファンタジー。サイトにはダウンロード版のみ有。残酷描写はたまに少しあるだけで、タグを付けるか付けまいか悩むレベルです。

一 雨宿り（1）（前書き）

上代と室町だか江戸だかをこっちゃにしたような、なんちゃってジヤパニーズファンタジー設定です。神道用語や祝詞も多く出てきますが、現実の定義や用法とは別物としてご覧下さい。

一 雨宿り（１）

—

あんた、雷は好きかい？

俺は大好きだね。自分の名前に雷の文字が入ってるからつてもあるが、真っ黒な雲の中にひらめく稲妻の光は、他のどんなものより格好いいじゃねえか。犬や狐や、小胆な奴らが、こぞつて穴蔵に頭をつつこんで震えている遙か上で、雲を引き裂き、空を駆け抜ける。俺もあんな風に生きたいもんだ。

もつとも、そんな事が言えるのも、そいつが雨を連れて来ない場合だけだ。なぜかって、俺は宿なしだから。

たまたま屋根の下にいる時はいいぜ、自分は濡れずに見物してられるからな。だが、こんな風に野原の真ん中でいきなりドザーッと来られた日には、まったく！

「くそつたれ！」

文句のひとつも言いたくなるつてもんだ。空きつ腹に雨がしみるぜ、ちくしうめ。

右にも左にも、人家はまったく見当たらなかった。うち捨てられて荒れ放題の畑、ガマだの葦だのがぼうぼうに茂った湿地。その間を走るこの小道の先には、前の宿でおかみが言ったのが正しければ、そろそろ豊平とよひらの村が見えて来るはずだ。そしてそこには、妖あやし退治で日銭を稼ぐ俺みたいな流れ者に、仕事や情報を恵んでくれる周旋屋がある。

……はず、なんだがな。くそ、雨で行く手が見えやしねえ。ああ、腹へった。

手の甲で何度も目を拭ったが、後から後から滝のように雨水がしったり落ちて、何もかもがぼんやりとにじんでいた。

だから、道端に木立が見えた時も、俺はそこに誰か——あるいは

『何か』——がいるとは思わず、やれ助かったと木陰に駆け込んだだけだった。

「ああくそ、ひでえ目にあつたぜ」

ぷう、と息をつく、水しぶきが散った。いやもう、頭のとっぺんから爪先まで、ずぶ濡れもいいとこだ。どつからどこまでが自分の体で、着物で、草鞋わらじなんだか、わかりやしねえ。目ん玉まで流れちまってやしねえだろうな。

あれこれ悪態をつきながら、なおも降り続く雨を恨めしく見上げた時だった。

フツ、と後ろで何かが息を吐いた。その熱が体に届く前に、俺はぱつと振り返り、腰に差した刀を抜いた。

待ってましたとばかり、雪のような白い輝きがこぼれる。俺の商売道具にして唯一の相棒、妖退治のために神殿で清められた銘刀、月華。どんな妖だろうと、こいつの前には……

「つて、なんだオイ」

構えた刀を下ろし、俺は拍子抜けした声をもらした。薄暗がりの中にいたのは、紛らわしくも真つ黒の犬ところだったのだ。子犬と言うにはでかいが、まだ成犬おとなじゃない。クウンと甘えるように鼻を鳴らし、無邪気な黒い目でじつとこつちを見上げてやがる。

「びつくりさせんじゃねえよ、わんころが。腹がへってんのか？」

悪いな、俺もだ。おまえにやる物がありや、自分で食ってるよ」

やれやれ。俺はため息をついて月華を鞘に収めた。わんころはそれをじつと見つめ、それからおもむろに近寄ると、ふんふんと俺の手を嗅いだ。

「だから、何も持ってねえつつってんだろ。シッシッ」

別に犬は嫌いじゃねえが、こうもまとわりつかれちゃ、落ち着かねえ。追い払おうとしたのに、わんころはしつこく俺の臭いを嗅ぎ、前足でちよいと袂を引っ掻きやがった。

「ええい、食つちまうぞコラ！」

業を煮やして俺がわめくのと、

「クロガネ、戻ってこい」

子供の声が言うのが、同時だった。俺は犬を驚かそうとして両手を振り上げたまま、ぽかんとなって声のした方を振り向いた。

木立の奥の暗がり、ぼうつと白いものが浮かぶ。さては今度こそ妖か、と俺は警戒したが、じきに正体がわかった。白犬を連れた、白い着物の子供だ。見たところ十二歳かそこらだが、こんな所で何してやがるんだ？

黒犬は尻尾をくるりと巻き上げて、嬉しそうにそっちへ駆け戻って行った。小僧は黒犬の頭をちょつとなでてから、顔を上げてまっすぐに俺を見た。

「脅かしてごめんよ、おじさん。こいつ人懐っこくて、構ってくれそうな人を見付けたらすぐに飛んでっちゃうんだ」

「誰がおじさんだ、お兄さんと言え」

餓鬼から見りやおっさんでも、俺はまだ三十路のかなり手前だ。

見知らぬ餓鬼から小父さんおじなんぞと呼ばれるほど、老けちゃいねえ。俺が唸ると、小僧は驚いたように目を丸くした。それからすぐ、面白そうに笑い出す。

「ごめん、お兄さん。俺あんまり、大人のひとの歳って分かんなくてさ。第一この天気での暗がりですの格好じゃ、おじさんでもおじいさんでも、区別なんてつかないよ」

笑われて俺は自分のなりを見下ろし、苦笑してしまった。確かに、薄暗い木陰にずぶ濡れの男がぬーっと立ってたんじゃ、人か化け物かも分からねえな。

「まあな。で、おまえさんはどこの誰だい。その装束ってことは、神殿の小僧か」

俺が何げなく問うと、小僧はふつと表情を消した。どうやら身の上について、あんまり詮索されたかねえらしい。短い沈黙の後、小僧は作ったような明るい口調で答えた。

「元は深谷の神殿にいたんだ。でも、一人前になるには、外へも出なきゃいけないって言われてさ。探し物の途中なんだ。そうそう、

おじさんを驚かせたこいつは黒鉄、こっちの白いのは雪白。俺は真理だよ」

「ご大層な名前だな」

俺は呆れて二匹の犬を眺めた。わんころなんざ、シロクロでいいじゃねえか。気取りやがつて、さすが神殿育ちはお犬様も違うつてことかねえ。小僧に至つては真理サマと来る。ぺっぺっ。それはともかく、名乗られちゃこっちも黙つてゐるわけにやいかねえ。

「俺はライカ、雷の火だ。流れ者でね」

「うん、賞金稼ぎだね。さっきの刀でわかった」

けろりと言われ、俺は顔をこわばらせた。無理に笑みを作ると、口が半分がひきつる。

「おい小僧、長生きしたきゃ、その呼び方はするんじゃない」

「どうして？ 流れ者とか根無し草とか言うより、正しい呼び方だと思っけど」

きょんとした小僧の面を張り飛ばさなかったのは、ひとえに腹が減りすぎて怒りも長続きしなかったからだ。

「正しくても、俺たちはそう呼ばれるのが嫌いなんだよ。向かつ腹が立つ。特に神殿の奴に言われるとな。神官どもは、自分たちが妖退治するのは金のためじゃなく、里の人間を守るためだ、なんぞとぬかしやがる」

「だって本当のことだよ」

「大人が話してる間は黙つてろ。で、奴らがいちいちかまけてられねえ雑魚には、雀の涙ほどの賞金をかけて、俺たちみたいな腕っ節だけの荒くれ者が、日銭を稼げるようにしてやつてゐる、ってわけだ。飯の種をくれてやつてんだ、ありがたく思え、ってな」

大体があのだ連中は、神官以外の奴が妖と関ると、途端にクソでも見るような目つきをしゃがる。月華みたいな刀は妖を斬つて穢れが溜まるから、時々神殿へ持つて行って清める必要があるんだが、そんな時でも、絶対に正面からは入らせちゃくれねえのだ。

「ふうん。俺が聞いた話とはずいぶん違うね」

小僧は単純に不思議そうな顔をしてつぶやいた。俺はなんだか疲れてしまって、近くの木にもたれると、ずるずる座り込んだ。

一 雨宿り(2)

「何を聞いたんだか知らねえが、世の中は良い子ちゃんの耳に入る気持ちのいい言葉ほどには、きれいでも楽しくもねえって事さ」

ため息をつく、腹の中に残っていた最後の空気までなくなつたような気がした。俺は小僧を見上げ、「おい、なんか食うもん持つてねえか」と投げやりに訊いた。

「ごめん。俺も昨日から何も食べてないんだ」

がつくり。俺は頭を膝の間に落とした。隣に小僧が来て、すとんと腰を下ろす。ちえっ、本当にこの二匹の犬を食ってやれたらいいんだがなあ。

と、小僧は何やらごそごそやって、胴乱どうらんから小さな物を取り出した。

「これぐらいならあるけど」

この際、口に入るならなんでもいい。俺はぱつと小僧の手に飛びついた。そしてふたたびがつくりする。木の皮じゃねえか。

「おなかは膨れないけど、少しは気が紛れるよ」

ほら、と小僧が言うので、何もないよりはマシかとその木っ端を受け取ってくわえた。しがんでいると、甘いような苦いような、妙な味が染み出てくる。確かに腹の足しにはならねえが、なんとなく飢えがおさまったような気がした。不思議なもんだ。

俺が骨をしゃぶる犬みたいにいじましく木の皮をかじっていると、横で小僧が勝手にしゃべりだした。

「俺がいた深谷の神殿ではね、賞金稼ぎには……あ、ごめん。流れ者には感謝しろって教えられたんだ」

「へーえ、そりやまた奇特なこった」

「神官の中でも法部に属する戦士たちは、いつも何人かで組んで妖退治をしているから、一人で勝手にあちこちに行くことは出来ないんだって。一匹二匹の小さな妖が悪さをしたからって、ちょっと行

って退治する、ってことが出来ないんだよ。そこで、おじ……お兄さんたちの出番だってわけ」

小僧はそこまで言って、俺が聞いているかどうか確かめるように、こつちの顔を覗き込んだ。ちえっ、まったく、なんて目をしてやがるんだか。純真無垢ってのはこういうのを言うのかね。

「知ってる？ 賞金稼ぎの中には、元神官戦士って人も結構いるんだよ」

「そいつぁ初耳だな」

俺は思わず本気で驚いてしまった。小僧は得たりとばかり、にっこりする。

「きつとおじ……お兄さんみたいに神官を嫌う人が多いから、言わないんじゃないかな」

厭味な小僧だな、いちいち言い直すんじゃないやねえよ、ちくしょう。

俺は苦い顔で睨んでやったが、薄暗がりだから見えなかったらしい。小僧は気にせず話を続けた。

「でも俺たちはそういう人の話をよく聞くよ。人を守りたくて神官になったのに、まるで自由がきかないから、しまいに誰かを助けるために飛び出して行っちゃうんだってさ」

「それが本当なら、神官も捨てたもんじゃねえがな。しかし俺が見てきた限りじゃ、神官なんざ、どいつもこいつもくそつたれだ」

俺は言い捨てて、雨足の弱まってきた空を見上げた。さつきより明るくなってきたようだ。これなら、もうじき出発できるだろう。今日中には豊平に着きたいからな。

小僧は、俺があんまり感動しなかったせいかな、ちよいとがっかりした様子で黙り込んだ。これだから餓鬼は嫌いなんだ、なんで俺がこんな気分にならなきゃなんねえんだよ？ 俺は弱い者いじめした悪党か？ 本当のことを言っただけだってのに！ ああもう。

しょうがねえ。俺はため息をついて、小僧の話に調子を合わせてやった。

「まあな、おまえがいたような田舎の神殿じゃ、話は違うのかも知

れねえな。俺はだいたい、豊かな村や大きな町を回って、せこい妖
ばっかり退治してるからよ。そういう所の神殿はどこーんとでかく
て立派だから、神官の連中もお高くとまってやがるんだ」

「そうかもね」

小僧は言って、神妙な顔つきでうなずいた。やれやれ。

「おつ……雨がやんだみたいだな。んじやな」

俺は立ち上がると、口にくわえていた木の皮をちよいとつまんで、
「これ、ありがとよ」

礼を言ってからその辺にポイと捨てた。俺が歩きだすより早く、
小僧が慌てて立ち上がり、二匹の犬とそろって俺を見上げた。おい、
まさか。

「もう行くの？」

……待て。ちょっと待て、待てったら！ そんな目で俺を見るな
！ しかも三人がかりとは卑怯だぞ！

「勘弁してくれ」

俺はうめいて顔を覆った。冗談じゃねえ、てめえの飯もままなら
ねえつてのに、いきなり一人と二匹の食いぶちまで面倒見られるか
ってんだ。

苦悩する俺を見て、小僧はおかしそうな笑い声を立てた。

「待ってよ、俺まだ何も言っていないよ」

「言ったも同然だろうが、くそ、わんころまで一緒になって見つめ
やがって！」

「あはは、おじさん、犬好きなんだ」

「おじさんじゃねえつつつてんだろ！」

凄んで見せたが、効果はなかった。ごめんごめん、なんて言いな
がら、小僧はけたけた笑ってやがる。

「はあ……まったく。あの子、俺はこれから豊平に行つて、周旋屋
で仕事もらつて、それを片付けなきゃ飯一杯にもありつけねえんだ
ぞ。ついて来たつて、いい事なんざなんつにもねえんだぞ」

「心配しなくても、俺だって妖退治に手を貸せるよ。こつ見えても

一応、神官としての修行は積んでるからね。簡単な法術は使えるし、剣も持つてる。雪白と黒鉄も戦えるよ」

「どうだかな」

俺は胡散臭い気分で二匹の犬を見やった。黒助の方は相変わらず機嫌良さそうに、尻尾を小さく揺らしながら無邪気に俺を見つめている。白い方は逆に、俺を値踏みするような目付きをしゃがった。何様のつもりだ、このわんころが。

「どっちにしるおまえらの行き先も豊平だつてんなら、しょうがねえ、ご一緒するさ。けど、いいのか？ 何か探し物してるんだろ」念のため小僧に確かめると、なぜだか小僧は急に曖昧な顔になってうなずいた。

「うん、いいんだ。どこにあるのか、はっきり分かってるわけじゃないから」

「……へえ？」

いったい何を探してるってんだ？ ちょいと気にはなるが、どうせそう長く一緒にいるわけでもねえだろうし、俺の知ったこっちゃねえな。

「じゃ、日が暮れちまわねえ内に行くか！」

景気づけに威勢よく上げた声に調子を合わせ、疲れた足を励まして歩きだす。

少し進んでから、俺はふと何かが気にかかり、ちらつと後ろを振り返った。小僧とわんころはしっかりついて来ている。どうやら、空腹のあまり木陰でまぼろしを見た、という都合のいい話にはなつてくれねえらしい。

（しかも……なんか余計なもんまでいやがるぞ）

俺は何も見なかったふりで、また前を向いた。だが間違えようもなく、俺たちのずっと後ろに、そこだけまだ雨が止んでいないかのような暗がり、うっそりと佇んでいた。

振り向かなくても分かる。そいつは、俺たちを黙って見送り……それからゆっくり、後を追って動き出すのだ。

妖とは少し気配が違う。今のところ悪さをする様子もない。下手につついて招き寄せるより、放っておきや自然に離れてくれるだろう。たぶん。

（でなけりゃ、こいつの出番ってただけだ）

俺は左手で月華の鞘を握り、そうならないことを祈った。この刀であいつが斬れるかどうか、ちよいと自信がなかったからだ。

二 豊平村

二

豊平村はその名の通り、豊かな平地だ。田圃には稲が青々と茂り、構えのでかい家が続いている。村の中心部に近づくにつれて、街道沿いにちまいました家が増えてきた。里の者や旅人を相手にした、色々な店の並びだ。

俺の後ろを歩きながら、小僧は物珍しげに、やたらきよるきよるしている。まあ、あちこちに走ってったり店先で騒いだりしねえだけ良しとするか……。里に入る前にあの影も薄くなつて消えちまつたようだし、贅沢言つてちゃきりがねえ。

道に面した店はどれも、構えはそれなりだが、商いは田舎の里らしく地味なもんばかりだ。鑄掛屋だの荒物屋だの、茶店だの。もちろん旅籠もあるが、今の俺たちや文無しだ。ちえっ、早いとこ周旋屋を見付けねえとな。

「にぎやかな町だね」

ふいに小僧が言った。俺は振り返り、呆れ顔をする。

「深谷つてのはどんなド田舎だ？ 確かにここはそれなりの村じゃあるが、町なんて言えるもんじゃねえぞ。町つてのはな、もつと色んな店がうわーつと並んで、人通りもこんなもんじゃねえ。飯屋に煮売屋、小間物屋。職人だつて建具師に大工に庭師に細工師とわんさか住んでるもんだ」

「ふうん。想像つかないや。深谷はね、百姓と炭焼きと猟師ぐらいしかいなくて、神殿にも明師様と書士さんがいるだけだったんだ」
「ミヨウシ？ ああ、祭礼を司る神官だな。それと記録係のオマケつきか」

神殿てのは、神様を祀ってるだけじゃなく、里の住民の記録をつけてもいる。生まれた、死んだ、結婚した。そのいちいちに神殿が

絡むんだから、当然だつて言やあ当然だ。で、もちろんそういう事がある度に金がかかる。神官サマが帳簿までつけてたんじゃ、肝心の祭礼がおろそかになるってんで、その仕事専門の下っ端がいるわけ。

「そんなド田舎じゃ、神官一人でも事足りるだろうに。金が余ってるんなら、俺によこせってんだ」

「けっ、と俺が毒づくくと、小僧はこっちを見上げて、大人じみた苦笑を浮かべやがった。

「明師様はもうだいぶ、お年だったからね。書き物をするには目が不自由だったんだよ」

「おまえにやらせりゃ手習いにもなって、一石二鳥じゃねえか。おっ、周旋屋の看板だ。やっと見付けたぞ。ちよっとでも前払いしてくれりゃいいんだがな」

「ごめんよ、と声をかけながら暖簾をくぐる。中には人つ子一人いなかった。ここが平和な里だつて証拠だな。こりゃ、仕事があるかどうか怪しいぞ。」

「誰かいねえのかい」

声を張り上げると、奥から「はいはい、ただ今」と男が一人、慌ててやって来た。血色のいいぽっちゃりした丸顔の中年だ。何かなし気に食わねえが、周旋屋の親父がどうでも仕事は仕事、銭は銭。

「よう。どうやらここは平和な里らしいが、流れ者もおこぼれにあずかせちゃくれねえか。できれば手っ取り早く済ませられるのがいいんだがね」

「それでしたら……」

親父は言いかけ、ぎよっと目を剥いた。なんなんだ？

俺は背後を振り返って、ああ、と納得した。餓鬼に犬ころまで連れた賞金稼ぎなんざ、そうそうお目にかかるもんじゃねえよな。

「後ろの奴らは気にすんなよ。そこらで行き会ってたまたま一緒になっただけだ」

「はあ……でも、神官様で？」

「まさか。こいつは白装束を着ちやいるが、まだ神官じゃねえ。一人前になるために修行してるところなんだとよ」

「それはまた、こんなに幼いのに感心なことだ」

親父は愛想笑いを浮かべ、揉み手でもしそうな様子で小僧の顔色をうかがう。やっぱり気に食わねえ。

「そいつのこたあどうでもいい。こちとら空きつ腹抱えて待つてんだよ、さっさと仕事をよこしやがれ」

苛々して物言いが剣呑になる。くそ、腹が減りすぎて親父の機嫌を取る余裕もありやしねえ。もちもちしたその頬つぺた、むしりつつて食ってやろうか。

俺の心中が分かったのか、親父は慌ててこちらに向き直ると、いそいそと帳面をめくりだした。

「はいはい、失礼致しました。何分この豊平は御霊も妖もとんと出ない所ですからね、神殿の方にもここ数年はまったくお願いすることもないほどでして……でもまあ、お困りのようだから、これなんていかがです」

親父は帳面を広げ、俺の方に向けて差し出した。俺はざっと目を通し、妙な顔になる。

「ふーん？ 要するに、この巫師^{ふし}を追い出してくれってことかい」

「ええ、そうです。村外れに住み着いておりましてね、何やら怪しい影やら奇妙な生き物が、その家の近くをうろついているのが薄気味悪くて。とは言っても今のところは格別悪さをするでもないんで、神殿にお願いするほどのことでもありませんし。第一、神官様においで頂くとなったら、謝礼もかなりのものですから、とてもとても「なんで自分たちで追い出さねえんだい。里の衆が皆して鍬^{くわ}持って脅しをかけりや、一発で出て行きそうな気がするがね」

「無茶おつしやらんで下さいよ。あたしらは妖のことも御霊^{みたま}のことも、何も知らんですよ。下手をして怒らせたらどうなるか！ だから皆で金を出し合って、賞金稼ぎに頼むことにしたんですよ」

親父は大袈裟なほどおびえた顔をして、身震いした。やれやれ、

白けちまう。

「まあな、流れ者だったら祟られようが呪い殺されようが、あんたらは痛くも痒くもねえからな」

「何をおっしゃいますか、そちらさんは妖退治の玄人でしょう？
年寄りの巫師ひとりぐらい、簡単なものでしょうに。ああそうだ、引き受けて頂けるのなら、いくらか前払いしますよ。腹が減っては戦は出来ぬ。そうでしょう？」

痛いところを突いてきやがる。俺は苦笑いするしかなかった。村外れにおとなしく住まってる年寄りを追い出すなんぞ、あんまり気持ちのいい仕事じゃねえが、仕方ねえ。こちらら腹と背中がくつきそうなんだ。

「ああ、確かにな。ほかには何もねえんだろ？　引き受けるさ」

てなわけで、俺と小僧は無事、かなり遅い昼飯にありついた。

一膳飯屋はもう店仕舞いをしかけていたが、こういう時は子供と犬ころって取り合わせは激烈によく効く。給仕の女が、俺のことを人買いでも見るように睨みやがったのは、ちと引っ掛かるが、ともかくまあ飯が食えりや何だっていいさ。

「お、来た来た。二日ぶりのまともな飯だ、ありがてえ」

湯氣を立てている飯に両手を合わせてから、まずは一口。

「……………」

おかしいな、こんだけ腹が減ってりや大概のもんは美味いはずなんだが。まずはねえんだが、何かこう、足りねえって言うか、妙な味だな。茄子の煮物の方は……うん、美味い。はて、どういことった？

複雑な顔でもぐもぐ口を動かしつつ、思わずちらっと店の奥を見る。たまたま目が合った給仕の女が、俺の顔を見て眉を逆立てやがった。うへえ、くわばらくわばら。

慌てて飯に向き直って一心に食い、あらかた片付いた頃になって小僧が口をきいた。

「雷火さん」

名前で呼びかけられ、およ、と俺は目をしばたいた。何度もおじさんと言ってはお兄さんと言い直すのが、いよいよ面倒になったってわけか。

「なんだ？」

「俺たちが追い出すっていう、フシって……何？」

おずおずと訊かれ、俺は目を丸くした。

「知らねえのか？　おいおい、冗談だろ。深谷ってのがいかにド田舎でも、一人ぐらいいなかったのか？」

「いなかったよ。神殿でも教わらなかったし」

「はあ……こりやたまげた。まあ、そんな所じゃ巫師がどうのと教えてみようがねえよな。そうだな、どう言やぁいいか……」

俺は、足元で残り物をがつついていている二匹の犬にちよつと目をやっってから、もつたいぶって説明してやった。

「巫師ってのはな、神官とは違うやり方で、妖や御霊を呼び寄せたり操ったりする連中さ。それで人に呪いをかけたり、人の秘密を暴いたり、縁結びや縁切りをしたりするんだ」

「悪い人たちなんだね？」

小僧が眉をひそめたので、俺はますます先輩面をしてそっくり返った。

「まあ大半はそうだな。話の通じねえ恐ろしいジジババばかりだが、皆が皆そうってわけじゃねえ。病や怪我や災難をふっかけることも出来るが、逆のこと、つまり治す方も出来るんだ。ただ神官と違って連中は自分勝手にやってるから、そこんところが厄介なのさ。病を治して貰いに行ったのに、怒らせたら逆にもっと悪くされるかも知れねえ。道ですれ違ったのに挨拶しなかったら、次の朝には大事な牛が死んでるかも知れねえ」

そこまで言って、茶をすすする。小僧は難しそうな顔で考え込んでいた。

「やっぱり悪い人みたいに聞こえるけど」

「悪いこともするが、貧乏人にとつちや重宝でもあるのさ。さつきの親父も言ってたろ、神官は金がかかる、って。巫師の方がたいていは安上がりなんだ。それに、隣のいけすかねえじじいをぎっくり腰にしてくれとか、村一番の別嬪さんを嫁にしたいとか、そういう頼み事は神官には出来ねえしな」

俺はちよつと意地の悪い気分になつて、にやにやしなから言つた。はてさて、神殿育ちの純真な小僧がどんな反応をするものやら。

ところが小僧が言つたことときたら、俺の予想とはてんで違つていた。

「でもこの村では、気味が悪いから追い出そうつて言つんだね。しかも自分たちでするんじゃないに、よそ者にやらせようとしてる。なんだか嫌な感じだなあ」

おおよ。こりや驚いたね。俺はとつさに何と言つたら良いものか分からず、馬鹿みたいにぽかんと口を開けて絶句した。真理の名前は伊達じゃねえってことらしい。

俺がまじまじと見ているのに気付き、小僧は顔を上げて「なに」と不審げに眉を寄せた。ちょいとばかり照れもまじっていたかも知れない。

「いやあ、おまえさん、世間知らずかと思いきや、なかなか言つじやねえか」

「えっ……俺、何か変なこと言つた？」

途端に小僧は赤くなる。俺はにやつとして身を屈め、小僧に耳打ちした。

「いや、この仕事が気に食わねえのは俺も同じさ。でもそれは、村中じゃ黙つてな」

それから俺はまた体を起こし、やれやれとこれ見よがしに伸びをしてから、楊枝で歯をせせつた。小僧は複雑な顔で俺を眺めていたが、やがてその目を楊枝入れに移し、おもむろに一本抜いて俺の真似を始めやがった。

「おいおい、やめとけよ。神官になろうつてえ奴が下衆な癖をつけ

「ちや困るぜ」

「そうなの？」

きょんととして問い返し、小僧は楊枝を前歯で挟んでぶらぶらさせる。何やってんだ、こいつは。俺は苦笑してその楊枝を取り上げ、空になった茶碗に放りこんだ。

「それより、おまえのことを聞かせろよ。何か探してるってったよな。何なんだ？」

俺の質問に、すぐには返事がなかった。小僧は目を伏せて、未練がましく楊枝を見ているふりをしたが、しばらくしてようやくぽつりと答えた。

「しるし」

「あ？」

「しるしを探してるんだ。一人前になる前に、誰もが自分だけの『しるし』を見付けなきゃいけないんだって。それが何なのかは人によって様々だけど、見れば必ず、それが自分の『しるし』だと分かる。だから、どこにあるどんな物かは、誰にも教えることは出来ないんだってさ」

「……何だそりゃ。んじゃ何か、『これだ！』って閃くまで、いつまでもどこまでも探し続けなきゃならねえってことか？ だったらそこから適当なもの見繕って帰ったって、バレねえんじゃねえのかい」

神官のやることあよく分からん。呆れた俺に、小僧は真剣な顔で首を振った。

「そういう問題じゃないんだ。法術や剣術を修めても、『しるし』を見付けなきゃ、自分を守ってくれる一番大事な力が得られないんだって」

「へーえ。普通はどういうものなんだ？」

「よく知らないんだ。深谷には戦士がいなかったから」

「明師さんは、妖退治はしねえのか」

「儀式で祓えるものなら退治するよ。でも武器や法術で戦うのは、

法部の人。法師とか戦士とかね。俺はまだ侍士^{じし}だけど。『しるし』はね、時々来て下さった羽山の法師様の話だと、鴉や犬みたいな動物だったり、草木や川だったりするんだって。太陽や月をしるしに持つ人は、ものすごく強いらしいよ」

話が戦士のことになった途端、嬉しそうによくまあしゃべること。それだけ懂れてるってことなんだろうなあ。その笑顔があんまり無邪気なもんで、俺は、胸に浮かんだ疑問はどこぞへ蹴っ飛ばして、別の事を口にした。

「おまえのも、何か格好いい『しるし』だといいな。何たって名前が真理なんだ、それに見合うのでなきゃな」

「俺は別に、蟻とか石でもいいんだけどね」

照れたように言いながらも、真理は期待に目を輝かせている。だから俺は言い出せなかった。

おまえみたいな小せえ子供が、もう一人前になるための『しるし』探しに出されるもんなのか、とか。

誰も深谷の名前を聞いたことがねえような遠い土地まで来なきゃ、『しるし』ってのは見付からねえもんなのか、とか。

——そういうことは、訊いちゃいけねえ気がした。

三 初仕事（１）

三

腹ごしらえを済ませて一休みした後、俺と小僧は連れ立って村外れへ向かった。もちろん、白黒のわんころどもも一緒だ。

巫師の住み着いたあばら家つてのは、田圃の間を走る小川に沿って、ずっと川上へ行ったところにあるって話だったが、途中やたらと二匹の犬があちこち嗅ぎ回るんで、はかどらねえったらありやしねえ。日が暮れる前にやつつけちまいてえのに、人間様の都合なんざお構いなしだ。

田圃にはちょうど水が張ってある時期で、稲の青々とした葉が風にそよいでいる。世話が行き届いていると見えて、何だか偽物臭えぐらいにきれいだ。川つぺりにはぼつぽつと若木が植えられていたりして、趣もある。しかし、あいにくこちら風流とは縁遠い流れ者だ。わんころに付き合って、田圃を見ながら歌を詠むってわけにもいかなえ。

「おい真理、この白黒兄弟、もちつときちんとしつけとけよ。道草ばつか食いやがって」

「何かが気になるんだよ」

答えた小僧も落ち着かない様子で、辺りを窺っている。

「何かつて、何が」

「分からない。でも、この村は変だつて気がする」

「おまえ、ほかの村を見たことあるのか？」

思わずそう言った俺に、小僧はいつちよまえにムツとした顔を向けた。

「そういう意味じゃなくて」

「ああ、分かった、分かっている。悪かった」

俺は慌てて手を挙げ、小僧を遮った。やれやれ、冗談が通じねえ

なあ。俺は足を止めてため息をつき、草むらでふんふんやつてるわんころどもを見やった。

「確かにね、この村はどことなく妙な空気が流れてる。それは俺も同感だよ。このぐらいの村になりや、人里に群がる小物の妖がちらほらしてるもんだ。神殿がすぐ近くにある場合は別だが、この神殿はどうやらちよいと遠いようだし、そこらに何か飛んでたつておかしかねえ。だがさっぱり見当たらねえとなると、村全体によつぽど強力なまじないでもかけてあるのか、その村外れの巫師がこの辺の妖を一匹残らず呼び集めてるのか……」

曖昧に言葉を濁した俺に代わって、小僧が偉そうに締めくくった。
「何にしる油断は禁物、だね」

生意気な。そりゃ俺の台詞だったの。とは思えど、それを口に出しちゃ大人気ねえ。

「そーゆーこつた」

それだけ言つて、ぺしんと軽く小僧の頭をはたいてやった。

「おら行くぞわんころども。さつさと片付けて財布にも餌をやらねえと、また野宿になつちまうぞ。おまえらは地べたで良くてもな、人間様はたまにや布団で寝たいんだ」

白黒二匹を急ぎ立てながら、さらに小川沿いの道を進む。田圃が途切れて人影もなくなった辺りで、ようやく目指す小屋が見付かった。どうやら水車小屋だったらしいが、ぶつ壊れちまつてるのは遠目にも分かった。茅葺き屋根にペンペン草が生えてらあ。

「ふーむ……見たとこ、特に変なもんはいねえな」

ちよいと手前で立ち止まり、とつくり小屋を眺めてみる。妖の姿はちらとも見えねえし、御霊の影もねえ。周旋屋の親父が言つた様子とは、ちと違うんじゃないか？

「しかし何だね、嫌な感じがしやるよ」

無意識に手がうなじをさすっていた。妖にしる御霊にしる、性質の悪いのがいやがる時は、ここら辺がムズムズする。今もそうだ。横を見ると、小僧は打って変わって真剣な顔つきになっていた。

二匹の犬はそれぞれ小屋を睨み、喉の奥で小さく唸っている。どうやら、こいつらにも分かるらしい。

「とりあえず、俺が様子を見るからな。おまえらは下がってろよ」
餓鬼とわんころに先陣を切らせるわけにやいかねえ。俺は用心しいしい小屋に近付き、まだ明るいのにきっちり閉ざされた戸を叩いた。

「おい、誰がいるか」

バンバン。てのひらで二回。返事はない。

「いるんだろ。巫師のじいさんよ」

ドンドンドン。拳で三回、叩き終わるや否や、ゴトリと戸が開いた。隙間から覗いたご面相に、俺はぎよっとなって後ずさる。シミと皺だらけの、病葉^{わくらば}みてえな皮が骸骨にへばりついた、なんとも化け物じみた顔だ。目ん玉は白く濁っていたが、それでも俺が見えるのか、ぎよろりとこつちを睨んでやがる。戸を開けた手はまるつきり枯れ枝みてえだ。

「よう。村の周旋屋でちよいと頼まれてな」

なんとか俺がそう言った途端、犬どもがワンワン吠えだした。くそ、うるせえぞ！ 気が散るじゃねえか。

じじいは瞬きもせず俺を見つめたまま、ゆっくり首を傾げた。そのままぼろつと首がもげちまいそうだ。うへえ。俺はゆがめた顔をごまかそうと咳払いして、言っても無駄だと予感しながら言葉を続けた。

「あんたが何をしたか知らねえが、村の連中はあんたがいるだけで不気味なんだよ。ここからあんたを追いつてくれって頼まれたんだ」

「わしゃあ……出て、行かん……ぞあ」

囁れた声が、じじいの喉から隙間風よろしく漏れてくる。今にも死にそうな声のくせに、目だけはぎらぎらして、おつかねえっとなぜ。

「そうは言ってもな、こんなとこに住んでたって、あんた何にもい

い事はねえだろう。村人に嫌われてるんじゃない、客も来ねえんだし……って、ああもう、ワンワンうるせえな！」

俺が後ろをちらつと見て舌打ちしたと同時に、じじいがにたあつと笑った。

「村の衆はあ、親切じゃで、な」

「何？ まさか」

やべえ！ 背筋に冷たいものが走り、俺は反射的に大きく飛びすさった。

入れ替わりに白と黒の影がさつと前へ飛び出し、じじいに躍りかかる。その瞬間、じじいの体が音を立てて破裂した。

「うわッ！」

固いものに突き飛ばされ、俺はぶざまにひっくり返った。ギャンッ、とわんころの悲鳴が聞こえる。ちくしょう、何がどうなってるんだ！？

頭を振って起き上がろうとしたが、俺の体はでけえ木の根っこにがつちり押さえ込まれていた。なんなんだ、くそ！ 月華を抜こうにも手が動かさねえ。じたばたしていると、根っこに見えたものが、ナメクジみたいにぐにやりと動いた。

「いつてえ！ くそおッ、離しやがれ化け物め、この……うげ！」

暴れると、根っこもどきがますます強く締め付けてきやがった。

無数の細い管が伸びて俺の体にはりつき、次々にブスリと突き刺さる。俺を針山にする気かよ！

その瞬間、俺の目の前にぬつと何かが現れた。

と思つたら黒鉄だ。化け物の根っこに食らいつき、牙を突き立てる。途端に化け物は、釣り上げられた魚よろしくビチビチ跳ねて、俺を離れた。しめた！

隙を逃さず素早く立ち上がり、月華を抜く。巨大な根っこは犬を振り落とそうと暴れまくっていたが、黒鉄の奴はがつちり食らいついたままだ。いいぞ、やるじゃねえか。

「今度はこっちの番だ、よくもやりやあがつたな！」

俺は月華を振りかぶり、のたうつ木の根に斬りつけた。感触は確かに生木だったが、傷口からは赤黒い血が噴き出し、根っこは大慌てでズルズル下がって行く。黒鉄がようやく奴を離し、俺のところに駆けてきた。

「助かったぜ、ありがとよ」

まずはわんころに礼を言ってから、俺はようやく何がどうなっているのかを見た。

三 初仕事(2)

じじいがいた場所には……わけわかんねえ化け物がいやがった。

根っこだけの木、とでも言えがいいのか？ 普通なら幹になつてるはずのところには、じじいの頭がくつついていた。しかも馬鹿でけえ。目ん玉ひとつで牛の頭ぐらいあるだろう。そのまわりから、大人が二人がかりでも抱えられそうにない太い根が十本ばかり張り出して、のたりのたり気味の悪い動きをしてやがる。びっしり生えたヒゲ根がザワザワうごめくさまときたら、まるでムカデの足みてえだ。その、数百本はありそうな根の間から、時々ちらつと嫌なもんが顔を出す。しなびた鳥の死骸だとか、しゃれこうべだとか。

てことは何か、つまり俺は奴の肥やしにされかかったってわけか？ うえつ。

俺が愕然と立ち尽くしていると、小僧と雪白が駆けつけてきた。

「おう、無事だったか」

俺が言うつと、小僧はうなずいて、嫌そうな顔でじじいの成れの果てと向き合った。

「古い木の妖だね」

「ああ、そろそろタコに化けて海に行きたいらしいぜ」

ようやく奴の見た目が何に似ているか気付き、俺はそんな冗談を飛ばした。が、山奥育ちの小僧には通じなかった。

「タコって？」

「……ああいう、ぐねぐねうにうにした生き物だと思っつけ。それより、どうやって始末する？ 俺一人じゃ、あの『足』全部はさばききれねえぞ。元が木だから、放つといって逃げちまえば、そう遠くまで追っかけては来ねえだろうがなあ」

「そういうわけにはいかないよ」

即座に小僧が言い返す。まあな、と俺もうなずいた。そして二人同時に口を開く。

「金が入らねえからな」

「人を襲う妖なんだから」

見事に全然違うことを言っちゃまって、俺と小僧はしらけた顔になった。そんなこったろうとは思ってたがね。やれやれ。俺はちよつと肩を竦めてから、気を取り直して続けた。

「ま、何にしる始末はつけねえとな。俺もやられっ放しは癪だ。さでどうするかね」

「木だから火には弱いと思うんだけど、半端な炎じゃ効きそうにないしなあ。おじさん、真名まなの法術は使えない？」

「あ？ 俺は神官じゃねえぞ。法術なんざ使えるかよ」

「そうじゃなくて……いいや、説明は後で。雪白、黒鉄！」

小僧が呼ぶと、二匹の犬はさつと小僧の前に座った。小僧が左右の手をそれぞれの頭に置き、何やらぶつぶつ唱える。諸々の神たち聞し召したまえ、とかなんとか言ってるようだが、そんな小聲で神様に聞こえるもんかねえ。

俺はなんとなく胡散臭い気分で見えていたが、その目の前で、二匹の犬がぼんやり輝きだしたもんで、さすがにあぐり口を開けちまった。しかもそれだけじゃねえ、わんこころどもの姿がこつ、伸びたり膨れたりしたように見えたと思ったら！

聞いて驚け、瞬きひとつの間に、そこには白と黒の戦装束に身を包んだ若武者ふたりが立っていたのだ。いやまったく、顎が外れるかと思っただね。ぽかんとしている俺に向かって、白い方は犬の時と同じく冷たい目をくれ、黒い方はにつこり笑いかけやがった。俺は何度も瞬きして目をこすったが、どうやらまぼろしじゃあないらしい。

「この世は一体どうしちゃったんだ？ じじいは弾けるわ、犬は化けるわ。俺は夢でも見てるのか」

「これは仮の姿だよ。おじさん、準備はいいかい？ できるだけ中心に近付いてから、本体に手のひらをしっかりと押し付けて。それから、俺の言うことを繰り返すんだ」

てきばきと小僧が指図する。こんな餓鬼に命令されるのは嬉しかねえが、化け犬の飼い主じゃ逆らえねえよなあ。どっちにしろ俺はこんな大物相手に戦ったことはねえ。こいつの言う通りにするしかないさそうだ。ちえっ。

あれこれ考えて俺がむつつり黙っていると、雪白の方がじろりと睨んできやがった。ああ可愛くねえ！

「分かったよ」渋々答えて、俺は月華を構えた。「さっさとやっちまおう。俺の血がすっかり流れ出ちまわねえうちに」

そう、さっきやられた、細い針で突かれたような傷から、いつまでもしつこくじわじわと血がにじみ出てやがるのだ。このままじゃあ目が回っちまう。小僧もやっとそれに気が付いたらしく、さっと青ざめた。

「おいおい、そんな悲惨な顔するな。まだ倒れやしねえよ。んじゃ、行くか」

にやっとして見せた俺に、小僧は黙ってうなづく。その目が前を向き、妖を見据えた。

枯れ木じじいの方も、俺たちがまた近付くつもりだと察したらしい。根っこが激しく動きだし、俺たちの方へ伸びてきた。その細い先端が足に届きかけた寸前、

「行くよ！」

小僧が地を蹴った。即座に白と黒の影が従う。俺も並んで走りだしていた。

二人の若武者が太刀をふるい、襲いかかる木の根をなぎ払う。もちろん俺の月華も負けちゃいねえ。しかし太い根はちょっとやそつとじゃ切れねえし、細い根はいくら払っても次々新しいのが生えてくる。

妖の血が辺り一面に飛び散って、何とも言えない臭気を放ちだした。その中を、俺と小僧は肩を並べてとにかく突き進む。

じじいの吐き出すかび臭い息が、まともに顔に吹き付けた。うえっぶ！ それを避けて横に回ると、小僧がいきなり俺の左手をつか

み、化け物に押し付けた。樹皮を張った生肉のような感触に、俺と
したことが思わず怯みそうになる。

「おい！ くそ、無茶すんじゃないねえ！」

慌てて俺は右手を振り上げ、危ういところで数本の根をなぎ払っ
たが、小僧は見ちゃいなかった。

「背中は二人に任せて、復唱して。いい？」

ああ、そっぴやそうだった。視界の端でじじいの目玉がぎよろり
と動くのが気になったが、すぐに黒鉄が俺の背を守って立ち、つい
でにその鬱陶しい光景も隠してくれた。

「我が名は雷火」

小僧が唱える言葉をそのまま繰り返す。

「火は赤きほむらなり」

気のせいかな、てのひらが熱くなってきたような……

「この名において命ずる」

手だけじゃねえ、胸の奥、肺腑の中に火がついたような、

「火炎招来！」

――刹那、それが爆発した。

いや、俺の中の火だけじゃねえ。現実には、目の前が真っ赤に燃え
上がったのだ。

耳をつんざく悲鳴と熱風にふっ飛ばされ、俺は後ろへごろごろ転
がっていった。あち、あちち、あちちち！

地面に転がったままじたばたしていると、小僧が駆けつけて、俺
の体に手をかざし、何かを払いのけるような仕草をした。途端にす
うっと熱が引いていき、俺はほーっと大きな息をつく。ああくそ、
死ぬかと思っただぜ……。

大の字になって伸びちまった俺の上から、小僧がひょっこり顔を
のぞかせやがった。

「大丈夫？」

「んなわけねえだろ！ 馬鹿野郎、俺を焼き殺す気か！？」

俺は跳び起きて、噛みつくように怒鳴った。が、わめいた口を閉

じるか閉じないか、犬に戻った黒鉄の奴が飛んできて、べろべろ顔を舐めまくるもんだからたまらねえ。ああもう、格好悪くて怒るに怒れねえだろが、ちくしょうめ。

「舐めるな！ 分かった、分かったよ、大丈夫だからやめろって！」
やつとのでことで黒鉄をひつpegすと、俺は袖で顔を拭いた。やれやれまったく……。

小僧がにやにやしてやがるのを睨みつけてから、俺は自分の表情をごまかそうとして、盛大な火柱を仰ぎ見た。生木だつてのによくまあ燃えるこつた。じじいはもはや悲鳴も上げず、根っここの端まですっかり炎に包まれている。水車小屋がべしやんと音を立てて、炎の海に沈んだ。

思わずじつと自分の手を見つめてみると、横から小僧が言った。
いや、小僧つてのはやめた方がいいな。化け犬の飼い主で、しかもこんな派手な火柱を立てちまう餓鬼だ。おっかねえ真理様のご高説拝聴、と言わなきゃならんか。

「ものの名前には力があるんだ。もちろん、人の名前もね。だからやり方さえ知っていれば、自分の名前からその力を引き出すことができるんだ。神官でなくてもいいんだよ」

「はー、なるほどねえ……まあしかし、てめえがこんがり焼けちまうんじゃ、使いてえとは思わねえな」

「練習すれば、もつとうまく使いこなせるようになるよ」

「まあ、気が向いたらな」

それだけ言つと、俺は考えるのも疲れて、またひっくり返つてしまった。今日は働き過ぎだ。慣れねえことするもんじゃねえや……。

四 村人と影（１）

四

火がおさまると、俺は川の上流で体を洗って、真理の持っていた血止め薬を塗ってもらった。妖はすっかり消し炭になっちまって、もうすっかりただの古い木にしか見えねえ。

最前まで燃えていた炎がちぎれて飛んでったみたいに、空はまぶしい茜色に輝いている。明日はいい天気になりそうだなあ。もつとも、俺たちが無事に明日を迎えられなきゃ、天気がどうでも関係なくなっちまうがね。

「さーて、と。ここからが面倒だぞ」

道端に座り込んだまま、俺は天を仰いだ。真理がきょとんとしてこつちを見る。お気楽な奴だぜ。

「いいか、あのじじいは何て言ってた？ 村の衆は親切だ、ってな。ひとつ所からたいして動き回れねえ妖があそこまででかくなったってことは、誰かが餌の世話をやってたって事だ。だが村人を食ってたんなら、俺たちが出向くまでもなく、とつくに焼き打ちされてらあな」

「ちよつと待ってよ、それじゃまさか、村の人たちが俺たちを騙したって言うのかい？」

「ほかにどう説明がつく？ 流れ者なら、いなくなっても誰も気にしねえだろ」

「でも、妖が負けたらどうなるのさ？ 今まで誰も倒せなかったみたいだけど、それにしたって、逃げた人もいるはずだよ。そしたら、神殿に知らせが行くはずで」

「そいつが神殿に行き着いたら、な」

俺は真理の反論を遮り、できるだけ淡々とした口調で言った。

「言いたかねえが、連中は獲物を選んでる。俺みたいにつだつの上

がらねえ流れ者は、せいぜい小物しか相手にした事がねえからな。まず確実に食われちまうだろうさ」

「でも運よく逃げられるかも……」

「そう、俺みたいにな。で、そういう流れ者が次にどうするか。俺たちや、この後どうする？ 金が必要から仕事を請けた、そうだろう？」

「そこまで言うと、やっと真理も察したようだった。愕然として口をぽかんと開け、絶句する。良い子にやちと刺激が強すぎたかね……。俺は頭を掻いた。」

「分かったか？ だから、ここからが厄介だって言っただのさ。依頼通り、怪しいじじいは追い出してやったんだ。金を貰わずに行く法はねえ。だが連中がおとなしく代金を払ってくれるかどうかが問題だな」

「神殿に知らせに行けば？」

「信じてくれるとは思えねえな。当の妖はこれこの通りだし、この村の連中は全員で口裏を合わせてるだろうよ。おまえが神殿の者だったらどっちを信じる？ 胡散臭くて素性の知れねえ流れ者が、妖を退治してやったんだから金をよこせって言つのと、その流れ者に因縁つけられた上に水車小屋を焼かれたってえ可哀想な村人と」

「……………」

さすがにもう、真理もそれ以上は言い返さなかった。俺たちは二人して、でっけたため息をついた。

「どうして村の人は、妖なんか養ってたんだろう」

「さあな。そんなことあどうでもいいさ。どんな理由があるにせよ、あの枯れ木じじいは焼けちまったんだ。後のことは村の連中に考えさせるさ。俺たちはとにかく、金が貰えりゃいいんだ……よつ、と言葉尻で勢いをつけて立ち上がる。いつまでも座り込んでても仕方がねえ。」

「さて、行くか。黒鉄、雪白、おっかねえ村人からご主人様を守ってやるんだぞ」

俺が言うと、二匹のわんころはそれなりの反応を見せた。つまり、雪白は「おまえに言われる筋合いはない」とばかりの面をし、黒鉄はピンと耳を立ててワンと一声。頼もしいこった。

そんなわけで、俺たちは煤けてぼろっちくなつたまま、来た道を引き返した。

すれ違いざまに何人かが、ぎょつとしたり、慌ててどこかへ走つてつたりした。周旋屋へ知らせに行くんだろう。けつ。

道々、真理の奴はずっと黙りこくっていた。何を考えているのやら、難しい顔をして。ま、なんとなく想像はつくがね。だから俺は、周旋屋の前で真理のちっせえ鼻先に指を突き付けてやった。

「おい。話せば分かる、なんて甘いこと考えるなよ」

どうやら凶星だったらしい。真理は途端に嫌な顔をしやがった。拗ねたつて可愛かねえぞ、馬鹿。

「世の中、おまえが考えるほど簡単じゃねえんだ。どんなご立派なことを言つたつてな、生きのびなきや何の意味もねえ。大体、これ以上深入りしたつて、後々この連中の面倒見られるわけでもねえだろ。な？ おまえは黙つて、俺に任せときな」

「……わかつたよ」

「ようし、いい子だ。じゃ、おまえとわんころどもは、ここに立つて退路を確保しとけ。村の衆を近寄らせるんじゃねえぞ」

言い置いて、俺は暖簾をくぐつた。

中にはまあ、怖そうな顔の若い衆がひい、ふう、みい……六人ばかり。狭苦しい店で待ち伏せとは、ご苦労なこつた。だが、俺が月華の鯉口を切ると、どいつも怯んだ様子を見せた。

「ひと仕事片付けてきた流れ者を労ってくれる、つてえ雰囲気じゃねえな。言つとくが、いまさら俺をぶちのめしても意味がねえぜ。あの妖は盛大に燃えちまつたからな」

「何の事ですかね」

周旋屋の親父が陰気な声で言った。もちろん、とぼけているわけじゃねえ。目と目が合うと、相手は一切了承済み、つてのが分かつ

た。俺は肩を竦め、番台に近付いた。

「あんたが追い出してくれつつた巫師のじじいはな、妖が化けてたのさ。だから退治した。結果としちゃ、依頼の通りだ。あとは金さえ貰えりゃ、いつもの仕事と同じ、吹聴するほどのこともねえ」

要するに、出すもん出しやあ黙つといてやる、って事だ。お互い、そこまで口にしたりはしねえが、親父もその事は分かってる。黙って番台の下から、銭の入った巾着を取り出した。じやらりと音ばかりは大層だが、銅銭ばかりで銀は一枚もねえ。

「ちと足りねえんじゃねえかい。前払いの分を合わせても、二人分の報酬には少ないぜ」

「お客さん、欲深は運を逃すことになりますよ」

「そんなら神殿に行つて、悪運を祓ってもらうさ」

ちくちくと嫌な応酬が続く。これまで何人の流れ者が同じようにこの親父に文句をつけて、ここに控えている若い衆にのされちまつたのやら。連中が手を出さねえのは、ひとえに俺が見た目よりも腕の立つことを恐れているからだ。こつちがちよつとでも脅えたら、瞬く間に食いつかれるだろう。

しばらく睨み合つた末に、親父は渋々と銀貨を出してきた。正直なところまだ足りねえと思つたが、親父の言う通り、欲は身を滅ぼす。ここらで手を打つか……。

俺は用心しながら素早く金を取り、袂に落とした。

「じゃ、あばよ。二度と来ねえから安心しな」

捨て台詞を残してさっさとおさらばしようとしたのだが、ちつとばかり動作が早すぎたらしい。背を向けた途端、俺の焦りを見抜いた親父が声を上げた。

「やれッ！」

同時に俺は、前へ飛ぶように転がった。空振りした棒や竹竿が絡まり、派手に騒ぎ立てる。俺は振り返らず、そのまま表へ飛び出した。

だが、それより先へは行けなかった。手に手に鍬だの鎌だの持つ

た連中が、ぐるりと店を取り囲んでいたのだ。二匹のわんころが牙をむいて唸っているが、じわじわと村人の半円が縮まってくる。中には申し訳なさそうな顔をした女までいやがった。くそ、悪いと思うんなら一緒になつてんじゃねえよ！

「おじさん……」

真理が青ざめた顔で振り向く。さもありません、妖と違ってこいつらは人間だ。簡単に吹っ飛ばしたり斬り殺したりできるもんでもない。一人二人ならちよいと怪我をさせてやりや逃げるだろうが、これだけ大勢となると、かえって逆上して手がつけられなくなっちゃう。なぶり殺しにされるなんざ、考えたくもねえや。

俺は真理と背中合わせに立ち、店から飛び出してきた血の気の多い奴を、顔面への一撃で殴り倒してやった。

四 村人と影（2）

「そいつらを村の外に出すな！」

店の奥から周旋屋の怒声が飛んだ。

「ちつ、疑り深え親父だぜ。二度と来ねえつつてんだろが！ それとも何か、これっぱかしの手切れ金も惜しいのかよ！」

「金は問題じゃあないんですよ」

親父が戸口に姿を現す。最初のいけ好かねえ丸ぼちゃ親父の印象は、いまや他人の血で肥え太った極悪人に変わっていた。まったくまさかここまでとはね。俺は月華の柄にそつと手をかけた。

「だったら何だつてんだ。言つたら、俺は金さえ貰えば、おまえらがやっていた事についてちや気にしねえ。それに、あの妖が焼けちまつた今じゃ、何を吹聴してもただの法螺にしかならねえんだ。何も問題はねえだろうが」

返事がない。俺は背筋がぞくつとした。おいおい、まさか……

「あれで終わりじゃねえつてのか？」

声がかすれた。背中越しに、真理が身をこわばらせるのが分かる。ちくしょう、こりやまずいぞ。

「あれのことを知られたら、この村は終わりだ」

人垣の中から、誰かが言った。

「可哀想だけどね、よそ者は信用できないんだよ」

「ごめんね、なんぞと言いながら、女が鎌を握り直す。勘弁してくれ。」

と、いきなり真理が声を上げた。

「いったい……どうして、どうしてそこまでして妖をかばうんですか。あの妖がそんなに大切なんですか！」

泣き出しそうな声に、村人たちが一瞬、たじろいだ。さすがに後ろめたいらしい。だがそれでも、囲みは緩まなかった。慣れてやがるんだ、こいつらは。助けてくれって声も、しゃべらないから見逃

してくれって頼みも、こいつらは聞き飽きて何も感じなくなつてやがるに違いねえ。なんて連中だ、くそっ！

「坊や、あの榛^{はん}の木はあたしらにとって、なくちゃならないものなんだよ。ここで暮らせばきっと分かるよ」

別の女が言った。途端に、馬鹿を言うな、とまわりから咎められる。なるほど、大人は殺しても胸が痛まねえが、子供だから助けてやろうってわけかい。一生この村に留まらせれば、秘密も漏れねえってか？ 図々しい。

緊張のせい、頭の回転がいつもの倍ぐらいに速くなった気がした。

あの妖はこいつら全員にとって「なくちゃならないもの」だが、いなくなつたら途端に何かが変わるってもんでもないらしい。燃えた時に何も起こらなかったしな。

で、奴はもともと榛の木で、つまり湿地に生えるが田圃の畦にもよく植えられてたりする木だ。奴がいたのも小川の上流。そいうや川つぺりに若木が植えられてたよなあ。しかもこの豊平はその名の通り豊かな米蔵。とくれば……。

「はあ、なるほどね。おまえら、あの妖に何か細工させてたんだな？ 稲がよく実るように、水や土にまぜものでもさせてたんだろ」

「――！」

背後で真理が息を飲む。村人たちの顔色がさつと変わった。大当たり。

道理で白黒二匹がやたらと水辺を嗅ぎ回っていたわけだ。世話の行き届いた田圃だと思つたが、雑草も虫も、あまりにも余計なものになさすぎた。飯が変な味だったのも、穢れた水で育ったせいだな。納得している俺に、周旋屋の親父が苦々しく唸った。

「ご明察。流れ者にしては頭が切れなさるね」

「そりやどうも。褒めたついでに見逃しちゃくれねえか。それともこつちの切れ味も試してみたいかい」

月華を鞘の上から軽く叩く。真相を見抜かれたところへ脅しをかけられ、さすがに親父も怯んだ。が、やっぱりそれでも、覚悟は変わらねえらしい。後ずさったのもわずかに半歩、すぐに威儀を正して、腰の引けた村人たちをぐつとねめまわしやがった。

こうなったら仕方がねえ。俺はため息をつく、諦めて月華の柄を握った。気は進まねえが、何人かぶった斬つてでも逃げなきゃな。何せ今は小僧と犬を養ってんだからよ。

「おい真理……」

背中越しにひそつとささやく。囲みの薄そうな所を指して、同時に突っ込むぞ、と合図した。が、真理の奴、聞いちゃいなかった。真っ黒な目を見開いて、自分たちの影が長く伸びている通りの向こうを凝視したまま、かたまっちまってやがる。

すっかりしろ、と言いかけてその瞬間、俺も立ち竦んだ。

地面につけた両足から、ぞわぞわつ、とものすごい悪寒が体をはいあがり、頭のとっぺんまで突き抜けたのだ。髪が全部逆立つ気がした。何だよこれは！

視線を落とすと、二匹の犬が耳をぴったり寝かせ、鼻面に皺を寄せて牙をむき出していた。が、尻尾は足の上に巻き込まれ、今にもキャンキャン鳴いて逃げ出しそうだ。

村の連中は俺たちほどには敏感じゃねえらしいが、それでも何か寒気はしたらしい。顔を見合わせ、ざわつきながらてんでに背後を振り返る。

「やばい」

口が勝手につぶやいた。まずい、いけねえ、何か良くねえもんが来やがる。俺の頭にはもう、村の連中のことなんざ微塵も残っちゃいなかった。

お天道様が沈んでいくのを、縄をかけてでも引き戻したくなった。東の方から薄闇が迫ってくる。その中に出来たひときわ暗い影が、通りの向こうからやって来る。

あいつだ。

村に入る前に、道で俺たちの後をつけてきた、あの影だ。ちくしよう！

逃げなきゃならねえのは分かってるのに、足は動かねえし、声も出せねえ。

視界の隅で、村人たちが同じように石になっちまっている。やがて、一番影に近い所にいた奴が、ふらつとよろけてそのままぱったり仰向けにひっくり返っちまった。

そしてまたひとり、膝をついて前のめりに倒れ臥す。続いて二、三人が同時に。

人が倒れるにつれて、影が濃く暗くなっていくように見える。夕焼け空までがその闇に毒されて、不気味な色に変わっていた。

「ひ……」

誰かがかすれ声をもらした。それが引き金になって、すさまじい悲鳴がいつせいに上がる。金切り声、泣き声、うろたえ怯えて助けを求める声。蜘蛛の子を散らすように、もう俺たちの事なんぞ無視して、てんでに影から遠ざかろうと逃げて行く。

俺も弾かれたように走り出していた。格好悪いが、この際そんなこと言ってられねえ。

だが十歩も行かずに慌てて止まり、振り返った。小僧も犬もついて来ねえ！

「何やってんだ馬鹿野郎！ 早く来い、逃げるんだ！」

ちくしょう、枯れ木じじいには怯まなかったくせに、何で立ち往生しやがるんだよ。

「こつちを見ろって！ 置いてくぞ、この愚図！」

地団駄踏んで喚く俺に一瞥もくれず、真理はやおら手をもたげ、パンと大きくひとつ柏手かしわでを打った。澄んでよく通るその音が、影のもたらす嫌な空気を、わずかに払いのけてくれた気がした。続けてもう一度。音に押されたように、影が歩みを止める。

「かけまくも畏き被^は処^{ところ}の大神等^{おおかみたち}、よろずの枉事罪穢^{まがこと}れを……」

真理が祝詞のりことを唱えだす。悠長なこと言ってて、本当に効き目があ

るんだろうな、おい。んな事してねえで逃げた方が賢いんじゃないかね？

「はらいたまい清めたまえと……」

声が震えた。影がまた動きだしやがったのだ。そら見たことか！
もうあとほんの数歩しか離れてねえ。

「真理！ そいつは放つといて逃げろ、被おうなんざ考えるな！」
こっちが喉を嚔らして叫んでるつてのに、真理の奴は振り向きもしねえ。これだから聞き分けの悪い餓鬼は！ 白黒の二匹はもうぴったり真理の足にへばりついていて、役に立ちそうにねえ。

「えいくそ、世話の焼ける！」

なんで俺がここまでしなきゃならねえんだ、我ながら自分に腹が立つ！

俺は思い切って駆け戻り、真理の腕をひつつかんだ。同時に影がぬうつと津波のように大きく立ち上がる。

「逃げろわんこども！」

無我夢中で俺は犬どもを蹴った。ギャンとも言わず、二匹は転がるように駆けて行く。影が落ちて俺たちを飲み込む寸前、何とか真理を思い切り突き飛ばしてやった。

頭の上から影が覆いかぶさる。闇に包まれたと同時に、なぜか昔の記憶がでたらめに脳裏をよぎった。弟と竹馬遊びをしたこと。おふくろの打ち掛け。親父の死にざま……

ああやれやれ、親子揃って化け物にやられて頓死かよ。みつともねえなあ。

——と、観念しかけたその時、

「やめろ！」

真理の絶叫が響くや、玻璃の碎けるような音がして、俺のまわりに数多の星が弾けた。
あまた

「うわっ！？ 何だ、こりやいったい」

驚いて目をぱちくりさせたその瞬間に、星の光はもう消えてなくなっていた。ついでに、どういうわけだか、影までも。

「……何だあ？」

往来に立ち尽くしたまま、俺はぽかーんと口を開けてしまった。

四 村人と影（3）

空はすっかり元通り、きれいな夕焼けの朱色と藤色がまじり合い、明るい星がひとつふたつ、瞬き始めていた。倒れたままの村人がいなければ、まるで何も起こらなかったかのように思えた。何なんだ、何がどうなってるんだ？

「おじさん、大丈夫？」

真理が駆けつけ、二匹の犬もいささか面目なさそうに寄って来る。「どうやら無事だよ。おまえ、あの影に何かしたのか？ いきなり消えちゃったぜ」

「俺は何もしてないよ。被詞^{はちつ}はちつとも効かなかったし、まさかやめろって言ったから消えた、なんてわけもないだろうし。おじさん、お守りが何か持つてるんじゃないの？」

「あいにく、そんなものが買えるほど懐に余裕はねえよ。心当たりとしたら月華ぐらいだが、今までこんな事はなかったしなあ」

俺はしげしげと月華を眺めた。たったひとつ譲り受けた、親父の形見。一応は由緒ある銘刀らしいが、そういう逸話が残されているでもねえし、神殿の連中も、何も言わなかったしなあ。俺は結局、よく分からねえ、と肩を竦めた。

「とにかく、今の内にとっと逃げようぜ。村の連中が戻ってきたら、ますますややこしいことになっちゃう」

「でも、倒れてる人たちは？」

「さあね。死んだか、気を失ってるのか知らねえが、自業自得さ。そうか、分かったぞ。あの影はきっと天罰だ。性根の腐ったこの村の連中に、天罰が下ったのさ。俺は善人だから助かったんだ、きつとそうだな」

うんうん。日頃の行いがものを言うってわけだ。

俺が納得してうなずいていると、真理が嫌な突っ込みを入れやがった。

「善い人だつて言うなら、このまま見捨てて行くのはひどいんじゃない？」

うぬ。可愛くねえな、この餓鬼や。

「あのなあ……俺たちを殺そうとした奴らだぞ。生きようが死のうが、知ったことかよ」

「駄目だよ」

真理は妙にきっぱり言つて、倒れた村人のかたわらに膝をついた。ははあ……なるほど。

「おまえのせいだから、か？」

ささやくように問いかける。村の連中がどこかで聞いてたら面倒だ。案の定、真理は振り向きもせず、小さな声で「多分」と答えた。「多分？」

「後で話すよ」

真理が言つと同時に、その足元に転がっていた村人が、うーんと唸つて目を開けた。若い男だ。怒りか恐怖で叫び出すかと思いきや、ぼうつとした様子で宙を見たまま口を半開きにしてやがる。俺はちよつとそいつを観察してから、別の奴を起こしに行った。もちろん、親切にしてやる義理なんざねえから、蹴飛ばしてやったわけだがね。倒れた連中は全員ちゃんと生きてはいたが、どいつもこいつも魂が抜けたみてえにばかんとして、何の反応も見せなかった。薄気味悪い。

「こいつら、どうなるんだ？」

「分からない。今までに影が人を襲うことなんて、なかったから」

答えた真理の声は沈痛だった。よく罪悪感なんざ抱けるもんだ。

あの影が何にしろ、俺たちはお陰で助かったようなもんだろくに。慈悲深いんだか、馬鹿なんだか。

「とにかく生きてるんならいいさ。あとはこいつらの身内がどうかするだろつよ。心配だつてんなら、どこかで神殿に寄つて事の次第を報告すりゃいいさ」

行くぞ、と真理の腕を取つて立たせる。地べたに座り込んだまま

の村人が、うつろな目でこつちを見上げて、しまりのない薄笑いを浮かべた。口元に力が入らなくて、勝手に顎が下がっただけかも知れねえが。

さすがに俺も気持ち悪くて見ていられず、無理やり真理を引きずるようにして、村から逃げ出した。袂でチャラチャラ音を立てる銭が、どうにも重かった。

「で、結局また野宿なわけか……。はあ」

街道脇のでつけえ櫂の根元で、俺は焚き火を起こした。布団が恋しいぜ……。

「ごめん、おじさん」

「謝るこたあねえよ。運が悪かったのさ。それに、おまえがいなきや俺はあの妖の肥やしにされておしまいだった。だから、無理にお前のせいにようとは思わねえよ。理由を話したくなきゃ話さなくていい。俺も聞きたいわけじゃねえんだから」

乾いた枝を火に食わせ、ごろんと横になる。腹はへってるし疲れてるし、もうふて寝するしかしようがねえ。

「……あの影はね」

ぼつ、と真理が話した。俺が顔だけ振り向くと、小僧は雪白の首を掻きながら、じっと地面を見つめていた。

「深谷を出た時からついて来てるんだ。あれは……きつと、『災い』なんだと思う」

パチパチツ、と炎がはぜた。揺らぐ明かりに照らされた横顔が、急にただの無力な子供に見えて、俺はいたたまれず目をそらした。なるほどな。こんなちっせえ餓鬼が一人で修行の旅なんぞ、おかしいと思っただんだ。

「おまえ、押し付けられたんだな」

何があったのか知らねえが、深谷を襲った災いを、里の連中は子供一人にくつつけて追い払ったんだろ。ひでえ連中だ。

「違うよ」

答えた真理の声は、泣き出しそうだった。本気で違うと言っているのか、違うと思いたくて否定しているだけなのか、よく分からなかった。俺がじつと真理を見ていると、やがてこっちを見て、悲しそうに笑った。

「知ってたんだ」

「……そうか」

「うん」

それきり、言葉が続かない。俺は何とも言えず、ちろちろと踊る炎を見つめた。

谷の連中が何をどう言ったのか、それとも何も言わなかったのか、それは分からねえ。どっちにしろ、可愛げなくも察しの良いこいつが、進んであの影を引き受けたってことは想像がつく。

しばらく待って、真理には事情を話す気がないとはっきりすると、俺は勢いをつけて起き上がった。

「ま、済んじまった事はしょうがねえ。今さら、ああすりや良かったのどのと言ったところで、何かが変わるわけでもねえしな。であいつはまだついて来ると思うか？ 今ところは消えちまってるようだが」

「分からない。でも、あれは……弾かれたって感じで、消されたようには思えなかった。ちょっと遠くへ弾き飛ばされてるけど、また戻ってくるって気がする」

「んじゃ、被う方法は？」

俺が訊くと、真理はまた、分からない、と首を振った。

「祝詞や弦打（じょううち）がまったく効かないわけじゃないみたいだけど、被い清めるには……何かもっと別の方法が必要なんだと思う。明師様が俺に『しるし』を探しに行けって言ったのは、そういう意味なのかもしれない」

「しかしその『しるし』ってのは何なのか、手掛かりひとつねえんだろ？ そりゃ、随分と先が長そうだな」

俺はわざと素っ気なく言って、相手の反応を見た。案の定、真理

はちよいとばかり不安げな顔をしてこちらを振り返った。俺はとばかり手を振ってやる。

「まあ頑張れよ」

真理は何か言おうとして口を開きかけたが、遠慮がはたらいたのか、そのままうつむいて黙り込んだ。まったく、こいつときたら。子供らしくねえ事してつから、災いなんぞ押し付けられるんだ、馬鹿。

キュウン、と声がして目をやると、黒鉄が主人よりもよっぽど素直な目で、俺を見つめていた。俺は思わず苦笑し、真つ黒な頭を掻いて毛を逆立ててやった。それから俺は腕組みし、おもむろに切り出した。

「さて、お別れする前にひとつふたつ、片付けとかにやらねえ問題があるな」

「問題？」

真理がきょんととして聞き返す。俺は袂から銭の巾着を取り出した。

「ひとつはこいつだ。仕事を請けたのは俺だし、とどめを刺したのも俺。周旋屋に交渉してこれだけの金をもぎ取ったのも、俺」

俺、俺、と数え上げていくと、さすがに真理も面白くなさそうな顔をした。おお、正直でよろしい。その横で雪白が剣呑な目付きをしやがったので、俺は慌てて「とは言え」と言葉を続けた。

「おまえと白黒二匹がいなきや、そもそも俺は生きちゃいねえだろう。だからこいつは公平に折半といこう。それはいい。だがおまえがこの先も旅を続けるんなら、これっぽっちじゃ足りねえだろうよ。行く先々の神殿を頼るにしても、今回みたいに、次の神殿まで何日もかかる、ってなこともあるだろうし、かと言っておまえみたいな子供じゃ、周旋屋に行くわけにもいかねえしな。心優しい俺様としちゃ、胸が痛むわけだ」

大袈裟に胸を押さえた俺に、真理が胡散臭げなまなざしをくれた。「何が言いたいのか、はつきりさせてくれない？」

「まあ待てよ。問題のふたつめはだな、俺の稼ぎと将来についてだ」
「……は？」

「俺も今まで結構長いこと妖退治をしてきたが、腕前と稼ぎについて
ちや——まあ、おまえも見ての通りさ。今まではそれでも何とかな
ったがよ、いつまでもこれじゃあ困る。いずれどっかに落ち着くた
めには、ちつとは金を貯めとかねえとな。だから、もちよつと実入
りの良い仕事をするためにも、腕を上げにやなんねえだろ？ たと
えば、ナント力っておまえが言ってた法術を身につけるとかなだ」
そこまで話すと、やつと真理も結論が見えて来たらしく、だんだ
んと顔を明るくした。俺もつられてにやりとする。

「いっぺんに解決する方法がありますかね、真理様？」

「あるよ、もちろん！」真理が笑い出した。「俺がおじさんに法術
を教えるよ。仕事も手伝う。それで稼ぎは折半。どう？」

「折半、ねえ。まあ、おまえにやお供もいるこつたし、それが妥当
かね。だがおまえと一緒に行くんなら、もひとつ条件がある」

言葉尻で真顔になり、俺はずいとい身を乗り出して真理を睨みつけ
た。

「何だい？」

「ちよいと怯んだ様子の真理に、俺は思いつきり苦々しく言ってや
った。」

「俺を『おじさん』って呼ぶな！」

——もちろん、返事はけたたましい笑い声だった。

（雷火之章・終）

一 占い師

綾女之章

—

体は湯上がりでほつかほか。獲れたての岩魚に塩をふってこんがり焼いて、ぬるめに爛したお酒と一緒にいただく。これがたまなのよねえ。色づきはじめて紅葉を見ながら、表で食べるごはんのおいしいこと。

山奥の温泉なんて湯治客ばかりじゃないの、なんて言って辛気臭い顔をする人もいるけど、少なくともここ、瀬場の里は違つ。

峠越えの道が通っているから、往來の商人やら旅人やら、いろんな人がここで泊まって湯につかり、疲れを癒して行く。湯治客もいないわけじゃないけど、今こうして床几から見渡す限りでは、圧倒的にそうした『通り過ぎるだけの客』が多い。

そんな中で、あたしは珍しい長逗留の客。商売が占い師だもんで、毎日大勢が行ったり来たりするこの里はうってつけ、ってわけ。

占い師にもいろんなのがいるけど、あたしは人相や手相を見ることにしている。それだと道具がいらないからね。

え？　つまりインチキかって？　無粋なことお言いでないよ。こう見えてもあたしには、ちゃんと霊力つてものがあるんだ。でもね、霊力があるからって何でも見えるわけじゃない。そこところが分からないお客が多いのさ。

まあ実際は、何を訊きに來たのかを最初に言い当ててやれば、それだけで大半は満足してくれるんだけどね。分かって貰えるのが嬉しいと見えて、悩み事をしゃべるだけしゃべって、すっきりして帰っちゃうのさ。ありがたいことだよ。おかげで今日も、夕餉に徳利を一本つけられるってわけさね。

あたしは上機嫌で盃を取り、眉をひそめた。空になつてゐるじゃないか。またあいつだね、やれやれ。心の中で毒づきながら、徳利から酒を注ぐ。肩の上で小さな影がサツと動き、背後に隠れた。すばしい奴。

気が付くと、だいぶん辺りは暗くなつていた。秋の日は釣瓶落、とはよく言つたもんだ。風もちよいと冷たくなつてきたね。あたしは肩をすぼめ、お膳を持って店の中に入った。それを待つていたように、女中が床几を片付けた。せつかちだねえ、嫌だよまったく。店の中にはまだ大勢の客がいて、わいわい賑やかに夕餉を楽しんでいた。あたしは適当に空いた席に座り、骨だけになった岩魚を未練がましくつつきまわす。

と、不意に男の声が耳に飛び込んできた。

「馬鹿、残すなもつたいねえ。ここが美味いんじゃないか」

べつだん大声つてわけでもなかったのに、なんでそれが気になつたんだか。あたしは不思議な気分でそちらを見やり、目をぱちくりさせた。

「でも、苦いんだよ。雪白にやつたら駄目なの？」

「それがもつたいねえつつてんだ。よこせ、俺が食う」

「ちよつと、おじさん！……あーあ」

皿を挟んでやいのやいのと言いつてゐるのは、若い男と、それよりもつと若い坊やの二人連れだった。何なんだろうねえ。おじと甥にしちゃあ、血のつながりがあるとは見えないよ。坊やの方は十四、五歳。目元涼しく賢そうな顔立ちで、あと五年もすればなかなかの美男子になりそうだ。男の方は……まあ、だから、それには似てないってことで。

でもまあ、仲が良さそうだから人買いでもないだろうし。あの二人が何でも、あたしが知つたことじゃないさね。ただなんとなく、坊やの方が暗い影を背負つてるように見えるのが、気がかりと言えは気がかりだけど。

耳元で小さな声がささやいた。

「あの男、賞金稼ぎだ」

おやおや。あたしは声に出さずに心の中で返事をしてやる。

（狩られるかも、って心配かい？）

「我に賞金はかかっておらぬ。ゆえに奴は我を狩らぬ」

ふうん。妖退治が生き甲斐って男でもないわけか。銭が貰えないような小物、相手にしてたらキリがないものねえ。存外、頭がはたらくのかもね。

そんな事を考えながらしげしげと男を眺めていると、肩からさつと奴が降りる気配がした。あたしはとっさに盃を取り上げ、酒を喉に流し込む。

（ちよいと、もう飲むんじゃないよ。この酒はあたしのなんだからね）

まったく、飲ん兵衛の妖は嫌になるよ。毎度、徳利の半分はとられちまうんだから。

小さな軽い気配が腕でためらった後、しぶしぶ肩に戻って来た。

「酒も過ごせば毒じゃ。我と分け合ってちょうど良い」

思わずあたしは失笑してしまった。身の丈が一割もない相手と、酒を折半では割に合わないじゃないか。

一人で笑ってしまったのをごまかすように、あたしはうつむいて新しい酒を注いだ。けれど、ちよつとばかり間が悪かったようだ。すぐ隣の席から、男がひとり、ふらつと立ち上がってこちらにやって来た。

「おう姐さん。今、俺を見て笑いやがったな」

毛むくじらのごつい手が机をバンと叩き、酒臭い息が降って来る。やれやれ。

「何だいあんた」

あたしは顔を上げ、酔っ払いに向かって首を傾げて見せた。

「あたしはどこも見ちゃいなかったよ。思い出し笑いさね、気にしなさんな」

「ごまかすんじゃないねえ！俺の方をじっと見てやがったくせに！」

「馬鹿お言いでないよ、誰が好きこのんで酔いどれ狸の顔なんざ見つめるもんかね」

呆れてうつかり口を滑らせ、おっと、と唇に手を当てる。客の間に笑いがこぼれ、酔っ払いはますます顔を赤くした。

「このアマ、誰が……！」

男が拳を振り上げる。あたしの耳元で、小さな声がささやいた。
「避けて良いぞ」

同時に、振り上げた手を別の誰かがつかんだ。おや、あの賞金稼ぎじゃないか。

「まあまあ。酒が入ると、わけもなく笑い出す奴もいるさ。その辺にしときなよ」

な、と笑顔で言いながら、賞金稼ぎは酔っ払いの手首を締め付けている。カチリと音がしたのは、刀の鯉口らしい。酔っ払いは怯んで後じさり、口の中でろれつの回らない文句をつぶやいた。その隙に、連れの男が酔っ払いの背中を抱きかかえる。

「すみません、こいつちよつと酒癖が悪くて。失礼、どうも」

他の客にもぺこぺこ頭を下げて、男は酔っ払いを引きずるようにして、店を出て行った。何だかねえ、酒癖が悪いのなら飲ませなきゃいいのにさ。ああいう酔っ払いは無粋で嫌いだよ。

あたしは首を振り、くさくさする気分を払った。それから賞金稼ぎを見上げ、につこりと愛想良く礼を言った。

「ありがとうございます、助かったよ」

「なに、大したことじゃねえよ」

言いながら、賞金稼ぎはあたしの向かいにどっかり座った。おやおや、何だい。

「あんたが見てたのは俺だろ？」

にやにやししながら賞金稼ぎが言ったもんで、あたしはふきだしてしまった。

「違うよ、馬鹿だね。あたしが見てたのは、あんたの連れの坊やさ。どつという関係だか知らないけど、放ったらかしてないで戻っておや

りよ」

あたしが坊やの方を見ると、相手もこっちの様子をじっと見守っていたらしく、まともに目が合った。途端に坊やはびっくりしたようにびよこんと背筋をのばし、恥ずかしそうに顔を赤らめる。うぶなこと、可愛いねえ。

あたしがひらひら手を振ってあげると、坊やは困った風情で、それでもぺこりと小さく頭を下げた。

「行儀が良いね、あんたのしつけじゃあなさそうだけど？」

くすくす笑って賞金稼ぎを見る。相手は苦笑いを浮かべ——それから、あたしの肩の辺りをひたと見据えてささやいた。

「さすがにお見通ししてわけかい。面白いのを連れてるだけはあるな」

「あのねえ、いくらサトリでも、人が考えていない事まで読み取れるわけじゃあないよ」

あたしもうんと小声でささやき返す。そう、あたしの肩にまつわりついて、さつきから飲み食いにおしゃべりしてくれる妖は、サトリというのだ。見た目はうんと小さな猿に似ているけれど、人の心を読む妖で、あたしの商売仲間。というより、なくてはならない片腕ってところかね。

賞金稼ぎが意外そうな顔をしたので、あたしは言っちゃった。

「たとえば、あんたの名前とか」

「雷火じゃと」サトリがささやいた。

サトリの声が聞こえるらしく、賞金稼ぎの雷火は眉を寄せた。何が言いたいのかはサトリでなくても分かったから、あたしは笑って説明してやった。

「今のはね、あたしが名前と言った時に、あんたが心の中で自分の名を思い浮かべたから、分かったんだよ。ああそうそう、あたしは綾女^{アヤメ}。占い師だからさ、こいつの事は内証にしとくれよ」

もちろん、客の中にもたまには、サトリの姿を見たり声を聞いたりするのがある。でも、そういう客は先にサトリの方が勘づいて隠

れてしまうから、滅多にばれることはない。

雷火は何とも言えない顔であたしを眺め、ちよつと頭を掻いた。
「ま、あんたが何を商売に使おうと勝手さ。そいつは悪さもしねえようだし。ただ、口止め料代わりに、ちつとあの小僧を見てやつちやくれねえか。あんたの占いが丸っきりのイカサマじゃなけりや、の話だが」

「探し物をしとるらしい。隠し事もな」

サトリがこしょこしょ言った。雷火は苦笑して、「話が早くて助かるね」と厭味っぽく唸る。あたしはわざと皮肉が通じないふりをしてやった。

「そうだよ、あたしは察しのいい女だからね。だけど物分かりは悪いんだ。坊やが何を隠してるにしろ、連れのあんたに言わない事を他人のあたしが勝手に聞き出すのは、筋が通らないってもんじゃないのかい」

坊やの背負ってる暗いものが見えるだけに、ずかずか土足で踏み込んだじゃあいけない、ってのはよく分かるのさ。サトリは何だって読み取ってそのまんま口に出すけれど、あたしは妖じゃない。

「何もあいつの口を割らせようってんじゃねえよ」

雷火が急いで言うと同時に、サトリもつぶやいた。

「『しるし』の手掛かりを占って欲しいんじゃないと。坊主の名前は真理。神官になるつもりらしいぞ。綾女、見るな見るな。我らの敵など増えぬが良い、坊主など命果てるまでさすらうが良いわ」

シシシシ、と耳障りな笑い声が続く。あたしは肩を揉むふりで、サトリを握り潰してやるうとした。もちろんサトリはその手を寸前でかわして、背中側へ逃げてしまったけれど。いまいましたらありやしない。向かいで雷火も、あたしの肩を睨みつけていた。

「ちよいとあんた、そんな怖い顔をするんじゃないよ。こいつは口は悪いけど、実際に何か悪さをするわけじゃないんだから。いちいち怒ってたら、気がおかしくなっちゃうよ」

「慣れてるんだな」

「長い付き合いだからね」

あたしは軽い口調でそう言つて、いつの間にか空になった徳利を逆さに振つた。

「とにかく、何か込み入つた事情もあるようだし、明日になつてから出直しといで。今日はもう店じまいだよ」

しまう店なんかないくせに、とても言いたそうな男に手を振り、あたしは席を立つた。心配そうにこつちを見ていた坊やの頭をちょいとなでて、勘定をすませて外に出る。

うつ、寒！

夜気が襟元に入り込み、あたしは身震いした。ほとんどの店はもう戸を閉^たてて、通りに落ちる明かりはちらほらとまばらになっている。早いところ宿に戻つて、布団に入つてしまおう。首を竦めて往來を小走りに急ぎながら、ふと、背筋がぞくつとして振り返つた。

……なんか、いるみたいだね。

闇夜に消える通りの向こう、町の外に、目には見えないけれど何かが佇んでいるのが感じられるよ。うつそりとした影。

「入つて来るんじゃないよ」

あたしは小声で言い、念を込めて宙に印を切つた。効いたのかどうか、よくわからない。何せ今は、酔つ払うほどじゃないとは言え、酒が入つてゐるしねえ。

まあ、朝になったらお天道様が追い払ってくれるだろ。

あたしは自分にそう言い聞かせて、道を急いだ。

二 過去と未来（1）

二

翌日の昼頃になって、あたしの店に坊やと雷火が連れ立ってやって来た。白黒二匹のお供もいる。そこらの犬とはちよつと違つみただね。

お天道様の下で見ると、坊やの着物はすっかり鼠色になつちまつてるものの、元はどうやら神官の白装束らしいと分かつた。長らく丈も直してないと見えて、つんつるてんだ。予想以上に面倒な事情がありそうだねえ。

「これがあんたの店つてわけかい」

雷火がにやにやしながら言つた。失敬な男だね、まったく。まあ、通りの端に腰掛けと卓を出しただけで、屋根も壁もないときちや、店とは言えないだろうけどさ。

「あたしにとつちや、大事な店だよ。ひやかしに来たんなら帰りな」
「おいおい、怒るなよ。悪かつたつて。ほれ真理、座つて見て貰え。そうそう、いくら別嬪さんが相手でも、妙なことは考えねえ方がいいぞ。サトリが憑いてるからな」

雷火にからかわれて、坊やはさつと赤くなつたけれど、即座に手厳しく言い返した。

「おじさんこそ、気を付けなよね」

「おやおや、一本取られたね、雷火」

思わずあたしが笑うと、雷火は苦笑いして「くそ餓鬼が」とかなんとかぼやきながら頭を振つた。あたしは肩の辺りで手を振つて、サトリを背中の方へ追いやつた。

「まあ安心おしよ。昨日ちよいと聞いた限りじゃ、どうやらサトリの出番つてわけでもなさそうだしね」

「相棒なしでも占えるのか？」と、これは雷火。

「重ね重ね失敬だね、あんたって奴は。あたしにはちゃんと霊力があるんだよ。でなきゃどうやってこいつを捕まえたと思うんだい」
あたしは小声ながらも剣呑な口調で言い返してやった。間に挟まれた坊やが居心地悪そうだもんで、ちよつと穏やかな調子に戻して言葉を続ける。

「ただね、この力だけじゃ占い師としてやって行くには不足なのさ。客は『分からない』なんて言葉を聞きたくて来るわけじゃないんだから」

「分からない、って事もあるんですか」

おずおずと坊やが尋ねた。この行儀の良さを、お連れさんもちよつとは見習って欲しいもんだねえ。

「未来も過去も、他人の気持ちも、何もかも見通せるような人間はいやしないよ。さてそれで、何を見て欲しいのか、改めて聞かせてもらおうかい。ここじゃ話しくいんだったら、どこか場所を変えてもいいよ」

坊やはちよつとためらい、振り向きはせずに後ろの雷火の様子を窺ってから、小さくうなずいた。ははあ、なるほどね。

あたしは通りを見渡して客になりそうな顔がないのを確かめると、立ち上がった。

「それじゃ、あんたたちの宿に行こうか。雷火、あんたはお供の二匹と散歩でもしておいでよ」

「おいおい」

慌てて雷火が抗議しかけたけれど、途端に黒犬の方が嬉しそうにワンと一声吠えて、足元をぐるぐる回りだした。おやまあ、元気なこと。早く行こうとばかり、雷火の足に頭突きしてせっついてるよ。
「待てよ、おい、俺はわんこどもの世話係じゃねえぞ」

「心配しなさんな、坊やを取って食いやしないよ。なるだけ正確に見るには、そばにほかの人間がいない方がいいのさ。そうさね、半刻もあれば足りるだろうよ」

あたしが言うと、雷火は不満げながらも、黒犬に押し出されるよ

うにして歩きだした。それまでお座りしていた白犬も、すつくと立ち上がる。

「雪白、頼むよ」

坊やが呼びかけると、白犬は先刻承知と言いたげな目をくれて、しつかりした足取りで雷火と黒犬を追って行った。

「いい名前だね」

あたしが言うと、坊やは嬉しそうにっこりした。

「うん。雪白と、黒鉄っていうんだ」

「坊やがつけたのかい？」

店を片付けながら訊いたもんで、その質問に坊やがどんな顔をしたのか、背を向けていて分からなかった。返事のかわりに気詰まりな沈黙があつて、あたしが振り返ると同時に、坊やはごまかすように答えた。

「俺には思いつけそうにないです」

「そうかい」

あたしも、ぽんと軽く応じておいた。

旅籠はたこに案内する道すがら、坊やは妙に陽気だった。雷火と出会った時のことや、ここに来るまでに片付けた仕事のこと、やらかしたへまなんかを、楽しそうによくしゃべった。きつと、この後で自分の過去、あるいは未来と向き合うのを、怖がつてるんだろう。

客の中にも時々いるんだよねえ。良くないことになりそうだとか、この商売はうまく行かないだろうとか、不安でいっぱいの客。大丈夫ですよ、って言ってもらいたくて来たくせに、やっぱり駄目だと言われるのが怖くて、肝心の占って欲しいことを言わずに、余計なことばかりしゃべりまくる。

案の定、坊やも、旅籠に着いた途端にぴたりと無口になった。

四畳半の狭い部屋で向かい合って座ると、まるで座敷牢みたいな重苦しい空気が満ちてくる。あたしはやれやれと苦笑した。

「そんなに怖がらなくても大丈夫だよ」

「怖がつてない」

即座に激しい声が返る。自分の口調に驚いたように、坊やは身じろぎした。それから、恥ずかしそうにうつむいてつぶやく。

「すみません」

「謝らなくてもいいよ。多かれ少なかれ、先を知るのは怖いものさね」

「だから、怖がってなんか……」

「いない？　だとしたら坊やはお馬鹿さんだよ。あんたは明日死ぬ、って言われるかもしれないのに、怖くないのかい？　明日や明後日ではなくても、病に倒れるとか、追いつきに殺されるとか、大事な人を失うとか……　そんな未来が見えるかもしれない。どんなに今が幸せでも、人生ってのはいつどこで落とし穴を用意してるかわからないものさね。それを怖がらないお馬鹿さんが、思わぬ穴に足を取られて、ひどい目に遭うのさ」

あたしが諭すと、坊やは少し落ち着いた表情になったものの、今度は別の不安に眉を寄せて言った。

「まるで、この世には災難しかないみたいに言うんですね」

思わずあたしは笑い声を立てた。

「極端だねえ。もちろん、いいことだってあるに決まってるじゃないか。禍福は糾える縄のごとし、ってね。つらくて苦しいことが、後で良い結果につながるかもしれないし、思わぬ幸運に小躍りしてたら、そのせいで不幸を招くかもしれない。世の中そんなに単純じやあないよ。さ、今は坊やの探し物のことを聞かなくちゃね」

あたしが促すと、坊やはこくんとうなずいて、真面目な口調で話した。

神官戦士になるための『しるし』のこと。自分はそれを見付けなければならぬのだけど、その手掛かりがまるきりないこと。『影』に憑かれているらしいこと、『しるし』というのはそれを抜く方法のことかもしれない、ということ。

「ふーん……ほかの神殿には行かなかったのかい？　その影とやらを抜くために、さ」

「影は神殿に近寄れないみたいです。だから、俺が神殿に入れば一度は離れるんですけど……神気の及ばない所まで出たら、またついて来る。いくら神殿にいる間に楔みそぎをして清めても、駄目なんです」

「奇妙だねえ。単なる『穢れ』ってわけでもなさそうだね」

「そもそも、どうしてこの坊やにくっついてるんだろ？ 坊や自身が穢れたのなら、神殿で清めてもらえばそれで済むはずだよ。はて。」

「つい考え込んだあたしに、坊やがおずおずと言った。」

「あの、俺が影のこと話したの、おじさんには内緒にして下さい」

「うん？ あのトンチキ、話すなって言ったのかい」

「あたしが問い返すと、サトリが憤慨したようにシュツと鳴いた。」

「占い師ごときに余計なことは話すな、じゃと。サトリに知られるのも厄介だ、しるしの手掛かりだけ訊いておけ、とな。知れば我らが彼奴をゆるするじやろうと」

「言いそうなことだよ」

「やれやれ。あたしは苦笑して、雷火の顔を思い浮かべた。金にがめついつて印象じゃあないけど、賞金稼ぎで暮らしているだけあって、何かと用心深そうなものね。いい気分はしないけど、腹を立てるほどのことでもない。サトリなんかと付き合ってるおかげで、あたしも心が広がったもんだよ。」

「そんならあいつが戻って来ないうちに、見てしまおうかね。さ、両手を出し」

「あたしはきちんと座り直し、ためらいがちに差し出された坊やの手を取った。」

「うまく見えるかどうかは、分からないよ。いいね」

「それだけ言っと、あたしは目を閉じた。ゆっくりと息をはずめ、心の中に星の光を思い描く。自分がすっかり光に変わったように感じたら、そのまま、光を重なり合ったてのひらにゆっくり集めていく。体のほかの所はなくなったように。」

それからそつと、少しずつ、水門を開く。星の光がてのひらを通
って、向こう側へと流れて行く――

二 過去と未来（2）（前書き）

注意：自然災害の描写があります。

二 過去と未来（2）

……山が見えた。

険しい山に挟まれた深い谷に、まばらに建つ家。小さな田畑。質素な身なりの人々。

古い小さな神殿。優しいまなざしの老神官。生まれたばかりの子犬たち。

（ここが坊やの故郷なんだね）

そう思った瞬間、不意に様子が変わった。

降りしきる雨。山がうめき、木々もろとも地滑りを起こして崩れ落ちる。大きな黒い岩が泥に飲みこまれる。濁って荒れ狂う川。橋が流される。

神官が祭壇の前で祈っている。泣き叫ぶ人々、怒り、絶望。

人柱を。鎮めるために。うちの子は駄目だ。うちの子だって。

こちらを指さす手、手、手。

その子は身寄りが無い。神に仕える身。うってつけ。

叫ぶ口、すぎる目、訴える声、声、声。

皆のために。その命を。

ぐるり、暗闇が回る。

老神官のつらそうな顔。見上げる二匹の犬。

行きなさい。

神官が手をもたげ、どこかを指さす。

ぐるり。日が昇る。

手はまだ指さしている。

行きなさい。

北へ――

ぱしん。光が弾け、闇が幕を引いた。

あたしは坊やの両手をしっかりと握ったまま、額が畳につきそうな

ほど前に屈んでいた。やれやれ、毎度のこととはいえ、あんまり格好良くはないねえ。

ふう、と息をついて顔を上げる。と、坊やはすっかり青ざめていた。

「坊やにも何か見えたかい？」

「……深谷の里が。明師様も」

かすれ声でつぶやくように答え、坊やは手をふりほどいた。その手を両膝の上で握り拳にして、きゅつと唇を噛む。見習いとはいえ神官だものね、坊やにも見えて当然か。

あたしは背筋をしゃんと伸ばし、坊やを見つめた。この子ときたら本当に、何て重いものを背負っているんだろう。

「『影』の正体は分かっているんだね」

「本当のところは知りません」坊やは首を振った。「たぶんあれが『災い』で、俺が深谷から離れている限り、皆は無事なんだと思うんですけど。はつきり教えられたわけじゃ、ありませんから」

「あんたを送り出した神官様は、なんて言っていたんだい」

「……皆を許してやりなさい、って」

答えた声が震え、ぽとりと涙の滴が畳に落ちた。

「ほかに方法がなくてすまない、でもおまえならきつと『しるし』を見付けられる、って。だけど」

言いかけてしゃくりあげ、言葉を飲み込む。参ったねえ、泣かれちゃかなわないよ。

あたしは手を伸ばすと、坊やの肩をそつと叩いた。

「そんなら、きっとその通りなんだよ。故郷が懐かしいとか、恋しいとかで泣きたいのなら、好きなだけ泣くがいいさね。でも、騙されたとか嘘をつかれたとか、恨んで泣いてるのなら、そんなのはおよし。神官様はあんたを救おうとしてた。それはあたしにもはつきり分かったんだから」

坊やは無言のまま何度もうなずいて、手の甲でごしごし目をこすった。嗚咽がおさまるまで少ししかかったけれど、それでもなんとか

顔を上げた時には、きりつとした顔になっていた。潔いこと、本当に将来が楽しみだよ。

「綾女さんが見たこと、おじさんには絶対に言わないで下さい」

「言わないよ。でも、あいつはあんたの事情を知ってるんじゃないのかい？」

「なんとなく察してはいるみたいです。でも、ちゃんと話した事はなくて。もし聞かせたら、怒り狂って深谷の皆を吊るし上げに行きかねないから」

そう言つて坊やは苦笑した。あたしは目を丸くして、驚いたふりをする。

「そんなに義侠心あふれる性質だとは思えないけどねえ。面倒見は良さそうだけどさ」

「口ではいいかげんなこと言ったりするけど、おじさんはすごくいい人だよ」

おやまあ。ですますも忘れて断言したね、この子は。

「本当にそうならいいけどね。さてと、落ち着いたところで、話を戻そうかい？」

おどけて軽い口調を作りながらも、用心深く話の舵を取る。坊やは一瞬怯んだものの、息をひとつ吸つてうなずいた。

「あんたが人柱にされそうになったのは、地滑りや洪水を鎮めるためだね」

「はい。長雨で山が崩れて、里の境を守っていた石が倒れてしまったから、そこから禍^{まが}つ神が入ってきたんだ、って皆が言いだしただです」

自分に向かって話すように、坊やは淡々と言葉をつないだ。

「雨がいつまでも止まなくて、川があふれて橋は流されるし、畑のものは腐っていくし。明師様がいくら祈つても駄目だった。それで寄り合いが開かれた時に、守り石のかわりに人柱を立てよう、ってことに決まって。……俺が選ばれたのは当然だと思う」

身寄りが無いから、か。自分たちは痛い思いをせずに、物事を良

くしようだなんて、勝手なものさね。あたしは話を邪魔しないように黙ったまま、憤りのため息をついた。

「でも、明師様は俺を埋めようとはしなかった。そのかわり、『しるし』を探しに行くように言われたんだ。雪白と黒鉄も一緒に。俺がいなくなったら、代わりにあの二匹が埋められそうだったからじゃないかな。神殿の犬だもんね」

そこで坊やはちよつと皮肉っぱい笑みをこぼし、顔を上げた。

「寄り合いの結果は聞いてたから、そんなこと出来るわけないって思ったんだけど、明師様が何回か里の皆を集めて話をされた後は、誰も何も言わなくなった。それどころか、里を発つ朝には皆が見送ってくれたけど……皆の顔を見たら、追い出されるんだ、つてすぐ分かったよ。一里も行かずに影が後ろに現れた時も、俺は驚かなかった」

言い終えて、坊やは深く息を吸った。目はまた涙で潤んでいたけれど、もう泣きはせず、そつぽを向いて堪えている。あたしはちよつと間を置いてから、問いかけた。

「嫌だ、つて言わなかったのかい」

坊やは黙ってうつむいた。そうだねえ、言えるわけないか。まわりの村人は敵だらけ、唯一味方の神官様に迷惑はかけられない。

あたしは坊やの横顔をとっくり見つめて思った。もし人柱にされていたら、この子は最後まで黙って土を被せられただろう。震えながら泣きはしても、齒を食いしばって、助けて、なんて叫びはしないだろう。困った子だよ。

ふう、とため息をついて、あたしはなるたけ穏やかに言った。

「言っておけば良かったね。たとえ無駄だとしてもさ」

坊やは振り向かない。その肩に暗い影が見える気がした。

「しまいこんだ言葉は毒になるんだよ。心の中にいつまでも留まって、内側からじわじわと蝕む毒さね。あたしも、いくつか抱えてる」
「……綾女さんも？」

お、やっところつちを見たね。

「そうさ。早くに親を亡くしてね。親戚が養ってくれてたんだけど、あの人たちも貧しかったもんで、あたしだけ人買いに売られたんだ。そのかわり、弟と妹は絶対にちゃんと育てるって約束させたけど、引き離されるのは辛かったねえ」

「……俺も」

小さな小さな声で、坊やがつぶやく。

「出て行きたくなんか、なかった」

「うん」

あたしもささやきで答えて、坊やの頭をそつとなでた。坊やはじつとしていたけれど、じきに恥ずかしくなってきたらしい。見る間に頬が桜色になって、うつむいてしまった。あはは、可愛い可愛い。おっと、笑っちゃ悪いね。あたしは手をひっこめて、顔をごまかすために咳払いした。

「それで？ 深谷を出たあと、北には何があったんだい？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4558y/>

昏い道連れ

2011年12月5日21時54分発行